

[授業名] ■■■■■■■■ [担当教官] ■■■■

■学部	■■■■■■■■■	■年	■■■■■■	■■■	■■ ■■
-----	-----------	----	--------	-----	-------

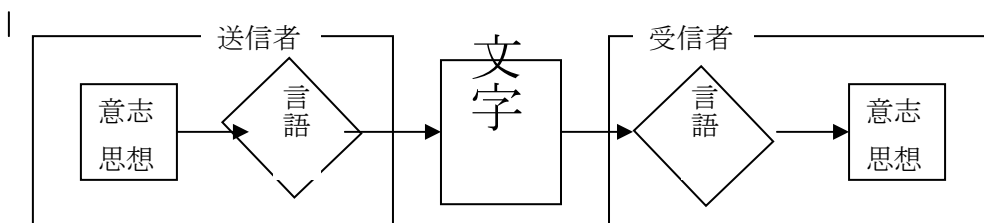
### はじめに

この講義で最も興味を引いたのは、文字は有機的性質と無機的性質の両方の特性を有していると感じた事である。ここでは、無機的性質を“文字を有限の数を持った記号とし、対象と一対一対応の機能を持つ性質”とし、有機的性質を“無機的性質以外の性質”とする（便宜上名付けさせていただいた）。それぞれの性質については後ほど扱うとして、受講する以前の私は文字の持つ無機的性質ばかりを気にしてしまい、有機的性質の理解に欠けていた。ゆえにその対比を含めてこのレポートで述べようと思う。

### 無機的性質について

無機的性質であるが、ここでは“一対一対応”というのがミソである。人から人に意思を伝達する際に、まず意志を言語に、その言語を文字に、文字を見て言語に、言語から意志にするというプロセスにおいて、文字はその介在の一端に過ぎないということだ。文字に記録する仕事を求めるならば、その文面上の意味が相違なく伝わることを求めるし、まさにデジタルの要素を持った“一対一対応”が求められる。

これを図に表すと、以下のようなになる。



言語を媒介するに当たって二つの方法があると考えられる。一つは言語における音のみを文字が担う方法、もう一つは言語における意味の一つを担う方法とする。

前者の場合は言語と文字の間に、さらに“音声”を媒介することになる。要するに日本語で言う平仮名、もしくは片仮名のみで文字を記した場合（一部“～は”などの例外はあるが）である。しかし、どこで区切るかなどの制約を厳しくしなければなかなか完全互換の実現は難しい。利便上、それを人為的に制御することで利用されている。

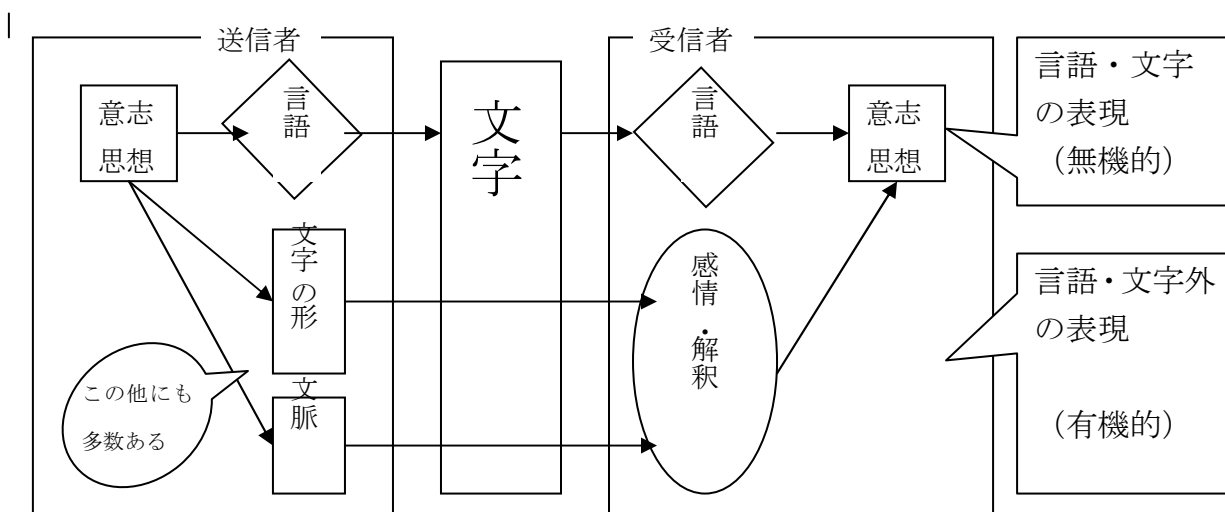
後者の場合は文字単体、もしくは文字の連が一つの意味を成していると考えられる。ゆえに意味記号的であり、直接意味を示すため伝わりやすい。余談ではあるが、過去に友人とのメールで漢字のみを扱い、文法もさして気にすることなくやりとりをしたことがある。意外にも相互理解があったためかすんなりとコミュニケーションに成功した（しかし、これは漢字を遊びであれば表意的に利用できるのもあって、漢字のすべてが表意的であると示しているわけではない）。

ここまですら無機的性質ではある。私は高校時代から演劇の戯曲や物語小説を書く趣味があり、その時は表したい事柄を表現するために、なるべく無機的性質を常に文章に求める

ことを意識していた。しかしこの授業を受けて、これから記述する有機的性質を知ると、それを研究した文章書きをしていればどれだけ表現の幅が広がったかと考えると、酷く惜しく思われる。

### 有機的性質について

ページ制限の都合、まず下図を見て欲しい。



すなわち、無機的性質のような“一対一”にとらわれていない表現を文字は有しているというのだ。改めて記しはしたがこの事は当然のことであり、文字におけるコミュニケーションには必須である。

これには、時代背景や人物背景も含まれる。普段使わない言葉を使えばそれは違和感に繋がるし、人物の特徴を表すのも言葉の選択などである。ただし、これは相互に共有した解釈があるからこそ可能なのであり、コミュニケーション相互の関係性が非常に問われる。ゆえに、一意的に伝わらない可能性を含み、全く関係性のない相手とのコミュニケーションでは無意味なものとなるばかりか、誤解を多く含んでしまう。

他、文字の形によっても感情が示せるし、色を変える、太字にするでもかなり印象を換えるとともに、伝えられる。視覚的表現も文字は持っていると言える。

と言うのも、これらの要素は会話に近づく（このレポートの書き始めは会話との対比であったが、スペース制限上省略させていただいた）。会話では言語としては簡素な表現を用いる事が多いが、それには会話外の援助が会って初めて成り立つ。一つが表情や声のトーンなどの言語以外の表現、もう一つがその会話の背景である。

### おわりに

無機的性質だけでは完全性を求めるため煩雑であり、有機的性質だけでは存在できない。しかしこの二つの性質を上手く利用することにより、文字における表現は格段に広がると思う。

この授業を通して自分の扱う文字の可能性を広げられたのは、非常に嬉しく思う。